

本論文は、『雨月物語』の作者にして、和学者・歌人として上方歌壇を牽引していた上田秋成の和学上の活動を明らかにするとともに、その背景にある真淵学の展開、また秋成に学んだ京都の和学者たちの足跡を辿ることによって、和学者・歌人としての秋成像を炙り出すことを試みたものである。

第一部「上田秋成〈前夜〉－真淵学の時代－」では、秋成が賀茂真淵の高弟加藤宇万伎に学んだ和学者であったことから分かるように、秋成の背後にある真淵学の流行という現象を、具体的な真淵の作品を取り上げることによって浮かび上がらせ、和学者秋成が生まれる素地が作られていたことを明らかにした。

第一章「真淵紀行『西かへり』の生成をめぐって 付、『冠辞考』成立管見」では、『西帰』の生成をめぐって、まず新出資料『西かへり』を紹介し、そこから窺える語句・文章の修正跡などに拠り、該書が真淵による草稿であることを明らかにした。その上で、修正の幾つかを取り上げて諸本との比較を行うことにより、抹消された内容を中心に推敲過程を辿った。さらに、派生する諸問題として、『西帰』が後年に増補されたとする説を否定するとともに、諸本調査によって得られた情報を元に、枕詞研究書の『冠辞考』成立が従来の説より十年程度遡ることを指摘した。

第二章「真淵紀行の伝播」では、第一章で扱った真淵紀行の諸本を整理し、寛政元年奥書を持つ系統が安田躬弦による奥書であり、江戸派で写されていた系統の本であることを指摘した上で、それとは異なる系統の本が、堂上歌壇の影響色濃い京都の地にも流布していたことを、秋成や伴蒿蹊とその周辺の和学者たちの資料を通して明らかにし、真淵学の伝播を考える一助とした。さらに、文芸性に乏しいという理由から決して評価が芳しいとは言えない真淵紀行を、和文の日次紀行や考証を備えた紀行の走りとしての位置や、後代に与えた影響の大きさに鑑み、積極的に再評価すべきであると主張した。

第三章「真淵評注本系統『金槐和歌集』伝本考－上方における流布を中心に－」では、現在 70 点以上の伝本が確認できている真淵の序と真淵説、および合点を書き入れられた、いわゆる真淵評注本系統『金槐和歌集』の奥書・識語などをもとに、同系統の本が全国的に流布していることを明らかにした上で、その過程で序や合点などが各文壇において増補・改変されていることを指摘するとともに、上方における流布に秋成が大きな役割を果たしていたことを明らかにした。

第二部「上田秋成の和学活動」では、近世中後期の上方の和学界を牽引してきた上田秋成の『万葉集』や『金槐和歌集』をめぐる活動や、周辺人物との雅交など、和学上の営為に迫ることで、秋成の和学者としての姿を炙り出すことを目指した。

第一章「上田秋成の万葉集講義－林鮎主の講義聴聞をめぐって－」では、秋成が京都で行っていた万葉講義をめぐって、秋成説が書き入れられた国文学研究資料館所蔵『万葉集』

を紹介し、旧蔵者についての三重県いなべ市における調査の報告を行うとともに、巻一表紙貼紙に記される「師鶉屋秋成大人」という秋成の呼称や、書入に残る記名をもとに、書入筆者が秋成の数少ない門人の一人であった林鮎主であることを実証した。加えて、荒木田久老の講義を補助線とすることで、秋成の講義時期を寛政十一年であるとの見解も示し、最後に、鮎主の和学活動についての素描を行った。

第二章「上田秋成の実朝・宗武をめぐる活動」では、源実朝と田安宗武を万葉調歌人と評した上田秋成の活動をめぐって、まず大通寺蔵『金槐和歌集抜萃』所載の奥書が、従来考えられていた真淵説ではなく、秋成説であると断定した。加えて、名古屋市蓬左文庫蔵秋成抜萃本『田安重槐御歌』の奥書等をもとに、該書の伝播状況を考察し、上方や伊勢に秋成の実朝・宗武評価が浸透していたことを明らかにしたうえで、それが正岡子規やアララギ派における実朝・宗武評価の前兆として位置づけられる可能性を論じた。

第三章「上田秋成と蘆庵社中 一雅交を論じて『金砂』に及ぶ一」では、まず、秋成と小沢蘆庵の門人達との交流が窺える資料である〔宇万伎三十年忌歌巻〕（秋成の師加藤宇万伎の三十年忌に催した歌会資料）を紹介し、特に秋成に従学していた大坂の旧蘆庵社中の存在を強調した。そのうえで斉収や昇道を始めとする旧蘆庵社中との交流を跡付け、さらに新出の秋成書簡や万葉評釈書『金砂』の分析を交えながら、『金砂』が、従来言われていたような秋成自身の為の著作ではなく、大坂の旧蘆庵社中のために執筆されたものであったことを明らかにし、晩年の秋成文学と人的交流とが関わり合う可能性を探った。

第三部「上田秋成の歌学」では、従来時間的・空間的周縁の歌論と断絶させられ、やや特権的に論じられてきた観のあった秋成の歌論・歌学を、近世中後期の和学壇や歌学史の流れの中に置いて再検討を加えた。

第一章「「目ひとつの神」の和歌史観」では、『春雨物語』の一編「目ひとつの神」の後半で登場する目ひとつの神が、隻眼であった秋成の戯画化であることを踏まえ、神の発言についての従来の解釈を訂正するとともに、その発言が秋成の持説そのものであり、そこには近世中期以降の和学者たちが抱いてきた和歌史観が投影されていること、また専ら蘆庵歌論との関連が説かれてきた本編について、真淵歌論の影響が強いことを明らかにした。

第二章「「和歌無師匠」考—近世期の展開と上田秋成の師弟観—」では、「目ひとつの神」にも見出すことができる、秋成の師弟観を理解するために、まず近世期における『詠歌大概』「和歌無師匠。以旧歌為師匠」の解釈が、大きく3つに分類できることを指摘した。そのうえで、松永貞徳が上記の言を曲解している人々を批判している『戴恩記』を秋成が称賛していることを踏まえ、秋成の師弟観が「和歌無師匠」をめぐる近世期の解釈の展開と不可分であることを指摘した。

第四部「上田秋成とその周辺」では、秋成に入門して和学を学んでいた京都の和学者たちや、秋成周辺にいた同時代の和学者たちの活動を跡付ける伝記的アプローチによって、秋成の生きた近世中後期上方文壇の諸相を明らかにすることを試みるとともに、和学者と

しての秋成像を捉え返すことも試みた。

第一章「林鮎主の和学活動と交流」では、従来、活動の実態が不分明であった林鮎主の和学活動と人的交流を明らかにすることにより、上方和学研究への道筋を示した。まず、本居宣長の日記や書簡に基づき宣長との交流を明らかにするとともに、鮎主の奥書資料や書入資料、周辺人物達の著書などの諸資料を駆使することにより、鮎主と上田秋成との関係はもちろん、万葉学者荒木田久老や京の宣長門人たちとの関係の濃密さをも明らかにし、京和学壇における鮎主の位置と京和学壇の学問態度についての見通しを述べた。

第二章「林鮎主年譜考」では、上田秋成や本居宣長の門人として多岐に亘る和学活動を展開していた林鮎主の諸活動を年譜形式で綴りながら、上方文壇の中に位置付けることを試みた。特に、古書の蒐集・書写や秋成・宣長への従学、さらに京都の和学者たちとの交流によって、古学に傾倒していく様子を浮き彫りにした。加えて、周辺の人物たちと協力し、初学者向け狂歌書の出版に尽力する狂歌師としての姿をも具体的に描き出し、和学者というにとどまらぬ、多彩な文人としての姿を浮かびあがらせた。

第三章「山地介寿の在洛時代」では、土佐藩士にして和学者でもあった山地介寿について、まず本居宣長との交友関係を、書簡などを用いて概観したうえで、奥書資料などに拠って、秋成と和学を通じた交流があったことを明らかにした。加えて、伴蒿蹊や長瀬真幸、栗田土満、山本亡洋ら多くの文人とも近しかったことを確認し、介寿が近世中後期上方和学壇において多様な活動を行っていたことを示した。さらに、秋成が介寿に送った送別の辞の分析を行い、宣長学に対する秋成の本音の一部分を垣間見た。

第四章「荒木田久老の上洛―『万葉考槻乃落葉四之巻解』の周辺―」では、秋成と同時代を生き、秋成と近い門人をも有する荒木田久老の上洛時の諸活動を跡付けたうえで、『万葉考槻乃落葉四之巻解』に秋成説が採り入れられていることを明らかにするとともに、その学説を伝達媒体としての門人たちの存在に注目し、京都の友人達との交流が、その学的交流を可能にしたことを論じた。

資料編では、第一部第一章で紹介した賀茂真淵自筆草稿『西かへり』の翻刻と影印を載せ、真淵のまとまった著作として最初期の生成過程を示すとともに（第一章）、第二部第三章で紹介した上田秋成筆〔宇万伎三十年忌歌巻〕の翻刻と影印を載せ、秋成と蘆庵社中の雅交が窺える歌会の全貌を明らかにし（第二章）、以て諸氏の便に供することとした。

以上、本論文では真淵流の和学を学んだ上田秋成の和学者・歌人としての側面に注目し、その諸活動を跡付け、さらに周辺人物との関係を解明していくことで、秋成の近世中後期上方文壇内における位置付けや、秋成の諸活動が持つ史的意義について論じてきた。従来、『雨月物語』の一書を以て近世文学の白眉と見なされてきた秋成を、同時代の文壇の中に置いてみることで、秋成の営為が如何なる相貌を見せてくれるか、ということに取り組み続けた成果が本論文である。